

企画展

「弥生から古墳へ」

東日本の古墳時代

石巻文化センター





朝顔形埴輪 舟塚古墳（茨城県新治郡玉里村）
茨城県立歴史館蔵



篆文銅鐘（出土地不明） 明治大學考古學博物館 藏



三角縁神獸鏡 (伝)物集女(京都府) 明治大学考古学博物館蔵



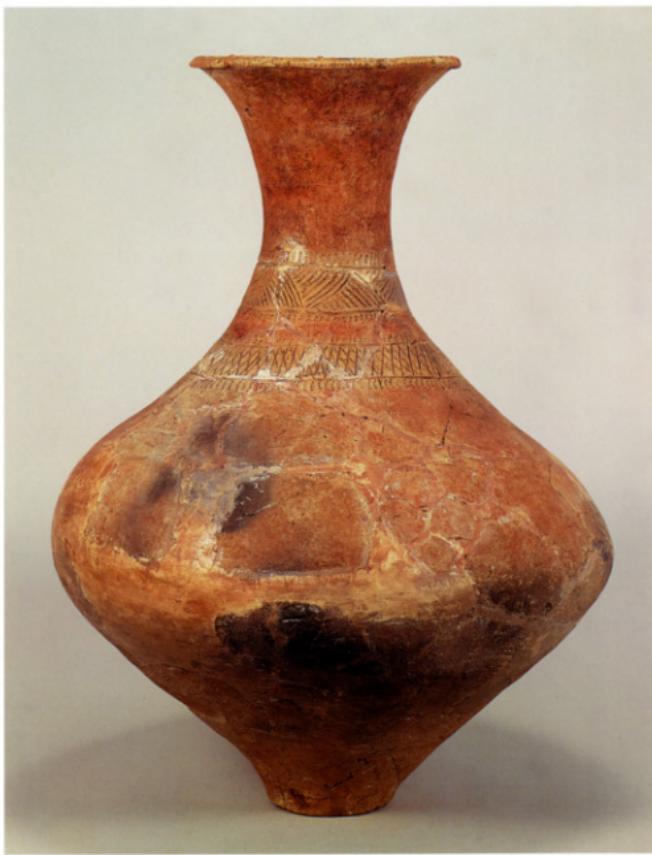
弥生土器・高环 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



土師器・器台 新山崎遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



縦縄文土器 新金沼遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



弥生土器・壺 伊勢山遺跡（神奈川県） 明治大学考古学博物館 藏



家形埴輪(茨城県内出土) 個人蔵



円筒埴輪(三角透し)
椎現山古墳(茨城県新治郡玉里村)
玉里村立史料館蔵



金銅製馬飾付冠 三昧塚古墳（茨城県行方郡玉造町） 茨城県立歴史館 藏
※展示は玉造町所蔵の複製品



金銅製垂飾付耳飾 三昧塚古墳（茨城県行方郡玉造町）
茨城県立歴史館 藏



銅 鍍 （伝）舟塚古墳（茨城県） 茨城県立歴史館 藏

企画展

東日本の古墳時代

～弥生から古墳へ～

2001.6.15(金)～7.29(日)

石巻文化センター

ごあいさつ

大陸の農耕文化が、弥生時代になると日本列島に伝播し、西日本を中心として日本列島の文化や社会のあり方に大きな影響を与えました。そして、弥生時代末期の邪馬台国を経て、古墳時代の階級社会の現出や国家形成へ、すなわち畿内中心のヤマト王権の登場へとつながっていきます。

もちろん、日本列島が均一に発展したわけではありません。西日本でヤマト王権が成立していた頃、東日本ではいまだに縄文文化の色彩が強く残っており、特に東北日本や北海道では、続縄文文化のように独自の文化が展開していました。

古墳時代に入ると、ヤマト王権が確立を見せ、王や大王の墓である前方後円墳が築造されるようになります。古墳には、鏡をはじめ、大刀やさまざまな装飾品が副葬され、墳丘には家や人物・馬などの埴輪が群像のように並べられていました。しかし、この頃石巻地方では、新山崎遺跡や新金沼遺跡の集落が営まれ、続縄文文化が継続しており、古墳は築造されていません。

その後、五松山洞窟遺跡という石巻地方を代表する古墳時代の地方豪族の墓が登場し、ヤマト王権と地方豪族の支配・被支配関係を考える上で貴重な情報を提供してくれています。

今回の展示では、弥生時代末期から古墳時代後期、年代的には3世紀末から6世紀に至る文化や支配関係の展開過程について、見てみたいと思います。さまざまな遺跡からの出土品をとおして、東日本、中でも仙台地域や石巻地方の状況はどうであったかを、関東の資料との対比の中であらためて考えていただければ幸いです。

最後に、本展覧会の開催にあたり、貴重な資料を出品いただきました所蔵者の方々、並びに御指導・御協力を賜りました関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成13年6月

石巻市教育委員会

教育長 阿部 和夫

目 次

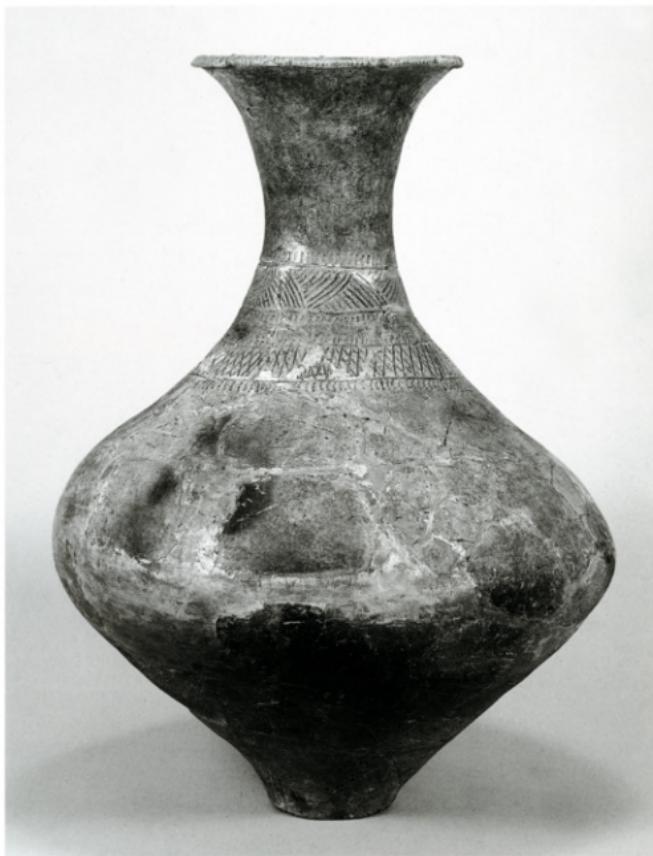
原色図版	卷頭
ごあいさつ	11
目次・凡例	12
弥生時代から卑弥呼の時代へ	13
ヤマト政権の時代	18
東北地方の古墳時代	24
用語解説	33
出品目録	38
御指導・御協力をいただいた方々	40
引用・参考文献	40

凡 例

1. この図録は、平成13年6月15日から7月29日までを会期として石巻文化センターが開催する企画展「東日本の古墳時代」の展示図録である。
2. 図版については、資料名称・出土遺跡名・所蔵者（保管者）の順に記載してある。
3. 本書は、できるだけ多くの出品資料を掲載するよう努めたが、紙面の都合上、掲載を割愛したものもある。
4. 今回の企画展開催にあたり、御指導・御協力をいただいた方々については、巻末に御芳名を記すとともに御好意に深く感謝の意を表する。
5. 本書の編集並びに執筆は、当館学芸員阿波広子が行った。

表 紙／農夫埴輪 茨城県新治郡八郷町柿岡出土 明治大学考古学博物館 藏
裏表紙／鹿形埴輪 三昧塚古墳（茨城県） 茨城県立歴史館 藏

I 弥生時代から卑弥呼の時代へ



弥生土器・壺 伊勢山遺跡（神奈川県） 明治大学考古学博物館 藏

弥生時代になると、東日本と西日本に文化の違いがあらわれる。大陸から伝えられた銅剣や銅鏡などの青銅器文化は西日本を中心に発展し、東日本では、縄文文化の影響を強く残した独自の文化が展開されていた。しかし、九州北部に伝えられた水稻農耕は、またたく間に北海道を除く日本列島全域に広まり、東北地方最北部の青森県で、弥生時代前期の水田遺跡が見つかっている。

弥生時代中期になると、「樂浪郡の海中に倭人ありて、分かれて百余国をなす」と『漢書』にあるように、列島内には倭人のクニが成立する。やがて、クニとクニとの争いが激化し、対立・統合をへて国家が形成されていく。小さなクニが集まって大きなクニができるていく。邪馬台国の女王卑弥呼の登場である。こうして、弥生時代から古墳時代へと移り変わるのである。

大陸との交流

弥生時代は、大陸から稻作が伝わり、これまでの狩猟・採集による獲得経済に農耕という新しい食料獲得方法が加わることとなる。また、大陸からの渡来人は、稻作だけではなく新しい文化をもち込んだ。それは無文の土器であり、これまでの縄文土器とはデザインのまったく違う土器であったろう。これらの要素を含んだものが後の弥生土器なのかもしれない。また、同時に金属器なども伝えられる。

稻作の開始

稻作は朝鮮半島から北部九州に伝来し、その後列島北部にまで及んだ。ただし、近年では、九州への伝来ルートのほかに東北の日本海側への大陸からの伝来ルートがあるという考えもある。



斧柄 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（高坏） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（蓋） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（鉢） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏

金属器の伝来

金属器は、弥生時代に伝えられた。やがて人々の手により、列島内でも青銅器が生産されはじめた。

銅鐸はマツリに使われたものであろう。金属器の奏でるその独特の音色は、古代人を魅了したことだろう。また、銅劍・銅戈・銅矛はマツリや副葬品としてだけでなく、戦いにも使われたとみられ、出土した銅戈・銅劍は先が欠けているものや修復して何度も使った痕跡の残るものなどが存在する。また、縄文時代では数少なかつた争いによる犠牲の人骨が、弥生時代になると格段に増えるのである。中には矢を何本も受けた傷跡を留める人骨や劍の尖端部が頭蓋骨にまで達した傷をもつ人骨など深い傷跡を留めた人骨が多く見つかっている。

木製品の使用

古代人が使った最も古の木製農耕具は、機能からみると、土を打ち引くことのできる鍬（平鍬）、引いてならすための鍬（横鍬）、打つための鍬（諸手鍬のうち幅の狭い鍬）、掘削して土を動かすための鋤、の四つが考えられるという。これらの農耕具が、それぞれの機能の中で細かく分化していくのは、生活していく中でその土地土地の土壤や環境に合ったものを工夫し取り入れた結果であり、古代人の豊かな知恵のあらわれである。

また、弥生時代には鍬が主に広く使われていたのが、古墳時代になると鋤が増加してくる傾向があるという。これは、古墳の造営といった土木・開墾具としての発展ではないかとの考え方もある。



装姿櫛文銅鐸（出土地不明） 明治大学考古学博物館 藏



鑿 件 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏

なかでいけみなみ
中在家南遺跡

遺跡は、宮城県仙台市若林区荒井字中在家・字札屋敷に所在する。弥生・古墳時代を中心とし、近世まで続く低湿地性の複合遺跡で、これまでの発掘調査で弥生土器などとともに多量の木製品がみつかっている。木製品には鍬や鋤の泥除け・鋤・掘り棒・斧の柄・堅杵・臼などがあり、その材質は、鍬・鋤・斧の柄・杵にはクヌギ属が、泥除けにはクリ材が使われている。本遺跡から木製品がみつかったことにより、東北地方における弥生時代の農耕具の器種組成のあり方が明らかとなった。



弥生土器（壺） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（鉢） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（蓋） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏



弥生土器（鉢） 中在家南遺跡（仙台市） 仙台市教育委員会 藏

卑弥呼の時代

卑弥呼が邪馬台国の女王として君臨する前、『魏志』倭人伝は「倭国大いに乱る」と伝えた。この頃、大陸での内乱に乘じるかのように倭国が乱れ何十年もの間内乱が続いたという。魔王ではこの内乱を鎮めることができず、女王が立って遂にこれを鎮めた。この女王の名は卑弥呼という。と『魏志』倭人伝は伝える。239（景初3）年、卑弥呼は魏の明帝に朝貢して、親魏倭王に任せられ、金印・紫綬を与えられた。その時、下賜された品々の中に銅鏡百枚が含まれており、この鏡が三角縁神獣鏡であると言われてきた。現在は、異なる見解も出されており、研究者間の間でも定説というものはない。

また、『魏志』倭人伝には、女王國（邪馬台国と考えられる）のほかに、伊都国、狗奴国などの國の名が出てくる。このことから、卑弥呼以外にも國の王が存在していると解釈できる。中でも狗奴國の魔王である卑弥弓呼（卑弓彌呼か）と卑弥呼は不和で、互いに戦っている状況を帶方郡の太守に報告している。その戦いの最中、卑弥呼は死んだ。卑弥呼の死に際し、大きな墓がつくられた。その径は百余歩（一歩は約1.5mであるから150m前後の規模をもつもの）、殉葬された奴婢は百余人であった、という。卑弥呼亡き後、魔王を立てたが國中が服従せず、壹与を女王とし國中がようやく治まった、とされる。時を同じくして、列島内には新しい力が生まれてくる。これがヤマト政権であり、新しい時代の幕開けとなりうるものなのではないだろうか。この時すでに弥生時代から古墳時代へと時代は移り変わっているのである。



弥生土器（壺）（東京都板橋区赤塚四丁目付近出土） 明治大学考古学博物館 藏

II ヤマト政権の時代



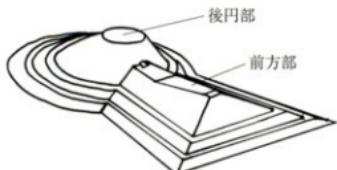
家形埴輪（参考資料） 舟塚古墳（茨城県） 明治大学考古学博物館 藏

列島内に生まれた新しい力こそヤマト政権であり、列島を統治していく国家体制のはじまりであるといえる。この頃、時代は古墳時代へと移り変わっていた。この時代の象徴である古墳は、墓であるとともに首長権の継承といった祭祀を執り行う場であり、権威を誇示するためのモニュメント的なものであったと考えられる。また、生活容器にも大きな変化があらわれた。土師器が出現し、弥生土器は消滅していく。土師器は、素焼きの土器であり、その器種はバラエティーに富んでいる。赤彩された土器も多く発見されていて、これは祭祀にかかわるものではないかと考えられている。土師器は、地域によって厚さや形などにその特色がみられるが、なかでも、東海地方の壺は、非常に薄く軽いのが特徴的であり、作り手の技術の高さを感じられる。

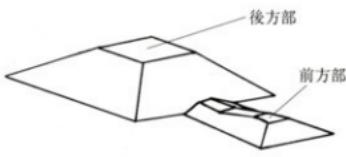
また、弥生時代を通じて遺跡数が少なかった地域が、古墳時代を迎えると急激に遺跡数が増加したり、それまで人が少なかった地域にムラが現れるようことが起きている。これは、古墳時代を迎えて人々の動きが活発になり、広範囲での交流がはじまった事のあらわれであろうと考えられる。地元でつくられた土器を他の地域へ持ち込むことで、お互いに影響しあい、新しい形が生み出されていくことにつながるのである。

古墳の築造

古墳の形には、大きく分けて4種類ある。①前方後円墳、②前方後方墳、③円墳、④方墳である。



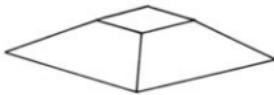
前方後円墳



前方後方墳



円 墳



方 墳

古墳時代の時期区分

古墳時代は、大きく分けて、①前期（3世紀～4世紀）、②中期（4世紀末～5世紀）、③後期（5世紀末～6世紀頃）の3期に区分される。地域によっては7世紀までを古墳時代に含めて考えることもある。

①前期：この時期の古墳は、自然の地形をうまく利用して、平地を見下ろす高い丘陵に単独で造られる特徴がある。古墳の形には、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などがある。遺体は、木棺・箱形石棺・割竹形石棺などの棺に入れられ、竪穴式石室に埋葬される例が多い。副葬品としては、鏡・玉類・銅鏡・鉄劍・碧玉製車輪石などがある。これらには呪術的な性格をもつものもあり、被葬者の首長としての性格も考えられる。

②中期：この時期の古墳は、平地に築かれる特徴があり、前方後円墳が大型化する時期でもある。畿内においては水をたえた周溝をめぐらすものが多くなる。埋葬施設は、前期以来の竪穴式石室が多いが、各地の支配者層の多くは長持形石棺を用いるようになる。副葬品は、武器・武具を中心とする軍事的な性格の強いものに変わる。また、新たに馬具や金銅製あるいは金銅装の装身具などが加わる。これは、古墳の被葬者が軍事的指導者としての性格を強く持つようになったことの反映と考えられる。

③後期：この時期の古墳は、小型化し、古墳群が出現する特徴がある。また、中期にはじまる横穴式石室が一般化し、壁面には彩色による絵画が発達する。副葬品は、須恵器・馬具などが多くなるとともに、金環なども広くみられ、ほかに頭椎大刀・水晶切小玉・ガラス丸玉などが多くなる。

※古墳時代の時期区分については諸説あるが、ここでは『国史大辞典』（吉川弘文館）に従った。

古墳の副葬品

馬 具

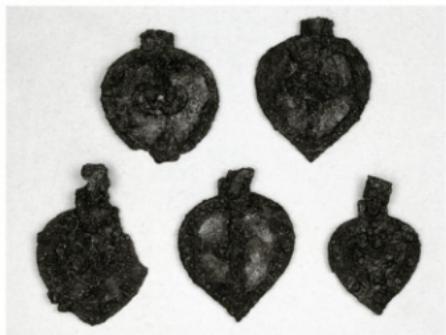
・鏡 板 一馬具の一種で、轡の喉の部分を面繫にとりつけるための金具。



鏡板 (伝) 舟塚古墳 (茨城県) 茨城県立歴史館蔵



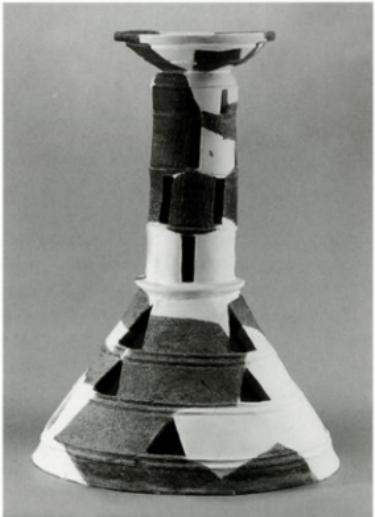
飾り馬



杏葉 (伝) 舟塚古墳 (茨城県) 茨城県立歴史館蔵

須恵器

古墳時代中期から、奈良・平安時代にわたって日本で生産された陶質土器。須恵器は一般に青灰色を呈し、堅く焼きしまっており、成形に輻轆を、焼成には窯を用いた。須恵器には、壺・甕・鉢・碗・盤・盤・皿などの器形があり、これを台・脚や蓋の有無、口頭部の形態、大小などによってさらに細分すれば、器形の種類は30以上になる。なお、焼成温度は摂氏1000度～1200度と推定される。須恵器の生産は、5世紀中ごろに朝鮮南部の伽耶地方から渡来した陶工たちによって開始されたと思われる。大阪南部の陶邑窯に始まり、その後生産地は各地方へ拡散したものと考えられる。



須恵器(筒形器台) 横現山古墳(茨城県)
玉里村立史料館蔵

ごんげんだいわら 権現平古墳群

茨城県新治郡玉里村大字下玉里地内に所在する。前方後円墳である権現山古墳（5号墳）をはじめ6基の円墳（1・3・6・7・9・10号墳）。3基の方墳（2・4・8号墳）をあわせて権現平古墳群とされている。しかし、6～10号墳は発掘調査をしておらず、古墳かどうかは定かではない。1号墳からは石棺がみつかっている。2号墳からは管玉と土師器が出土している。3号墳からは土師器が出土している。4号墳からは玉類が出土している。

ごんげんやまと 権現山古墳

茨城県新治郡玉里村大字下玉里地内に所在する、全長89mの前方後円墳。平成8年の調査により、主体部は、後円部と前方部墳丘の2か所にあり、後円部のものは板石組み合わせによる箱式石棺と推定、前方部のものは本棺直葬と考えられている。大刀・鉄鎌などの副葬品のはか土師器・須恵器・円筒埴輪などが出土している。近接する舟塚古墳の前段階と考えられることから5世紀後半から6世紀前半に位置づけられる。



円筒埴輪 権現山古墳（茨城県） 玉里村立史料館 藏



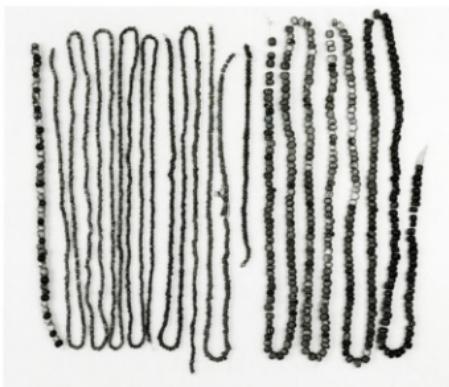
古墳のくびれ部から出土した土師器 権現山古墳（茨城県）
玉里村立史料館 藏



円筒埴輪（線割入り） 権現山古墳（茨城県）
玉里村立史料館 藏

さんまいづか
三昧塚古墳

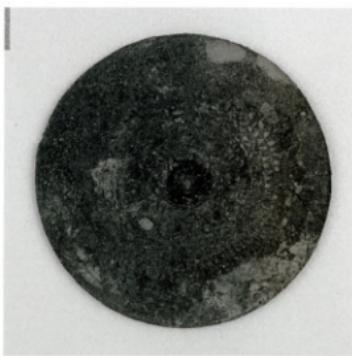
茨城県行方郡玉造町沖州に所在する、全長85mの前方後円墳。昭和30年の調査によって、縄掛突起を持つ箱式石棺が発見された。棺内には金銅製冠・鏡・玉類等の多くの副葬品、棺外からは武器・武具・工具・馬具等の副葬品がみつかっている。また、墳丘からは様々な埴輪が出土している。6世紀前半に位置づけられる。



小玉 三昧塚古墳(茨城県) 茨城県立歴史館蔵



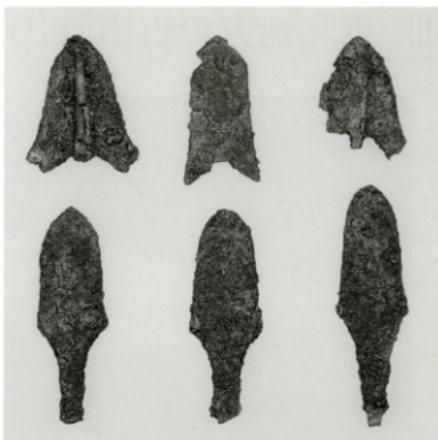
平縁変形四神四獸鏡 三昧塚古墳(茨城県) 茨城県立歴史館蔵



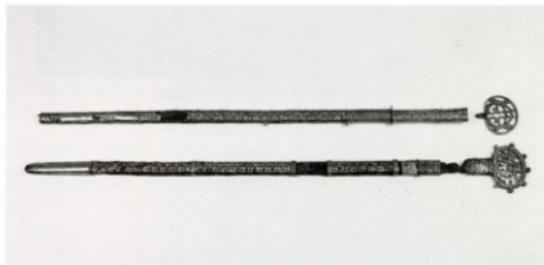
変形乳文鏡 三昧塚古墳(茨城県) 茨城県立歴史館蔵

ふなつか 舟塚古墳

茨城県新治郡玉里村上玉里に所在する、全長 88 m の前方後円墳。昭和 40 年から 45 年にかけて明治大学による調査が行われ、後円部に二重式箱式石棺、墳丘に三重の埴輪列が確認された。盜掘されていたため、多くの副葬品は発掘品が伝えられた形で残っている。また、近接する権現山古墳に後続すると考えられることから、6 世紀中頃に位置づけられる。



鉄 鏡 (伝) 舟塚古墳(茨城県) 茨城県立歴史館 藏



環頭大刀 (下:参考資料) (伝) 舟塚古墳(茨城県)
茨城県立歴史館 藏



切子玉 (伝) 舟塚古墳(茨城県)
茨城県立歴史館 藏

ふじとうみね 富士峯古墳

茨城県霞ヶ浦町柏崎に所在する、全長 78 m の前方後円墳。平成 2 年の調査により、後円部より粘土郭、前方部より箱式石棺が発見された。武器・馬具・玉類等のほか、墳丘および周溝からは多数の埴輪がみつかっている。6 世紀前半に位置づけられる。



勾 玉 富士峯古墳(茨城県) 茨城県立歴史館 藏

III 東北地方の古墳時代



遠見塚古墳全景（仙台市） 写真提供：仙台市教育委員会

従来、東北地方の古墳は、畿内を中心とした西日本に立ち遅れて築造されると思われていた。しかし、会津大塚山古墳（福島県会津若松市所在）の調査によって、他の地域とほとんど変わらない時期に出現したことが明らかとなった。豊富な副葬品は、ヤマト政権との政治的な結びつきを示すものであろう。

さらに、各地におけるその後の発掘調査により、古墳時代前期（3世紀から4世紀頃）に位置づけられる古墳の多くが、東北地方の南部に築かれていることが分かってきた。さらに、東北地方の前期の土師器として位置づけられている壺蓋式土器を出土する遺跡が、古墳よりもやや広い範囲に分布しており、東北地方の南部には、古墳を築造する首長たちと、彼らを支える社会が出現していたことが明らかにされている。

石巻地域でも、古墳時代前期に属する集落遺跡が数多くあり、田道町遺跡・新山崎遺跡・鹿松貝塚・新金沼遺跡などが近年、相次いで調査されている。特に新金沼遺跡においては、北海道系と東海系の両方の土器が出土するなど、この頃の石巻地域の様相を明らかにする遺跡として注目されている。

東北地方の古墳

遠見塚古墳（国指定史跡）

宮城県仙台市若林区遠見塚に所在する前方後円墳。全長110mで、南に前方部を向いている。

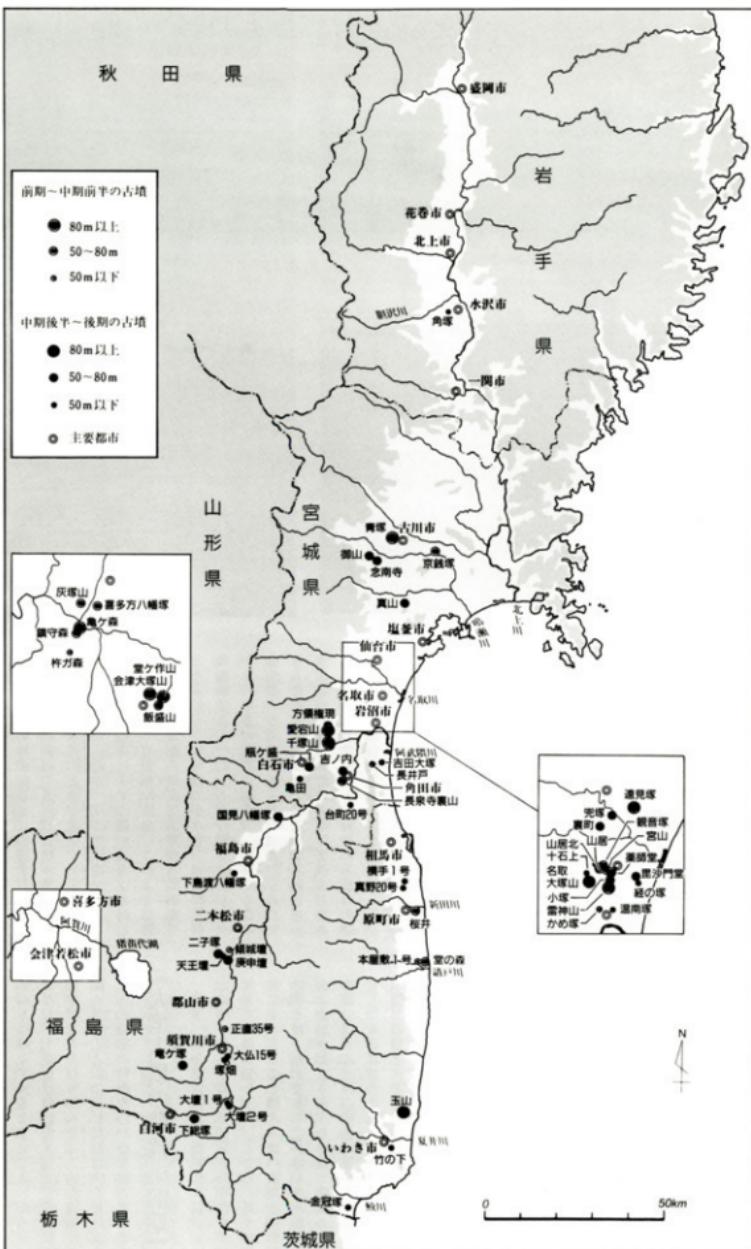
昭和22年に進駐軍によって後円部北半分の土が取られ、2基の主体部が発見されたが、その際に墓壇内から土師器の壺が出土したのみで、副葬品はみつからなかった。遺体を埋葬した主体部は、後円部墳頂にあり、そこに2基の木棺が埋葬されていた。副葬品は、碧玉製管玉・ガラス玉・櫛がみつかった。4世紀末の築造と考えられる。

雷神山古墳（国指定史跡）

宮城県名取市植松に所在する前方後円墳。全長168mで、東北地方最大の規模をもつ。埋葬部の調査は行われておらず、前方部、後円部とともに複数の段築があり、葺石が全面に敷かれている。埴輪と土師器の壺型土器が出土している。埴輪は破片のため全体がよく分からないが、壺型埴輪とされている。土器は底部に焼成前の穿孔がある二重口縁壺である。4世紀後半から末頃の築造と考えられる。



人物埴輪 出土地不明 明治大学考古学博物館蔵



陸奥国の古墳分布図

※『朝日百科 日本の歴史 別冊 通巻14号』—古墳はなぜつくられたのかー(朝日新聞社、1995年)より転載

会津大塚山古墳（国指定史跡）

福島県会津若松市一箕町大字八幡に所在する、全長114mの前方後円墳。昭和39年の調査により、後円部で2基の割竹型木棺が発見された。棺中には、三角縁神獣鏡、三葉環頭大刀、多数の武器、鉄製農耕具、装飾品などの副葬品が納められていた。豊富な副葬品から、被葬者はヤマト政権と深い関係をもつものであつたことが考えられる。4世紀後半に位置づけられる。

裏町古墳

宮城県仙台市太白区西多賀に所在する、全長50mの前方後円墳。昭和47年の調査により、主体部は、後円部の墳頂に主軸に沿って東西方向に造られていたことが分かった。副葬品として、銅鏡・鐵製の刀子・鐵鎌・櫛がみつかっている。主体部周辺からは、須恵器の器台・樽型甕・台付甕が出土している。墳丘全域からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪が多量に出土している。円筒埴輪には、透かし孔が円形のものと、半円形のものの2種類ある。5世紀中頃に位置づけられる。

本屋敷古墳群

福島県浪江町大字北幾世橋に所在する古墳群。調査により、前方後方墳1基（1号墳）、方墳2基（2・4号墳）、円墳1基（3号墳）、堅穴住居などが発見されている。1号墳は、全長37mで、後方部と前方部の2か所で主体部がみつかった。前方部は、長さ約7mの割竹形木棺で、前方部は割石でつくられた石棺であった。木棺からは、菅玉、ガラス玉、櫛などが出土している。2号墳は、長辺約13mの方墳。4号墳は、短辺約16mの方墳で、長さ5m前後の2つの割竹形木棺がみつかった。規模や位置の点から1号墳が主墳と考えられる。1号墳は4世紀中頃に位置づけられる。2～4号墳は前期から中期にかけて築造されたと考えられる。



銀製空玉
(伝)舟塚古墳(茨城県)
茨城県立歴史館蔵



四獸鏡
(伝)舟塚古墳(茨城県)
茨城県立歴史館蔵



金装(上)・銀装(下) 大刀 (伝)舟塚古墳(茨城県)
茨城県立歴史館蔵

宮城県の集落遺跡

南小泉遺跡

宮城県仙台市若林区南小泉・遠見塚・古城に所在する、繩文時代から近世までの複合遺跡。これまでの調査によって、古墳時代の住居跡は60軒以上発見されている。

山前遺跡（国指定史跡）

宮城県遠田郡小牛田町北浦字山前に所在する。古墳時代前の堅穴住居跡25軒と大溝3条が発見されている。大溝からは、土器の他に古墳時代前期の木製品が出土した。

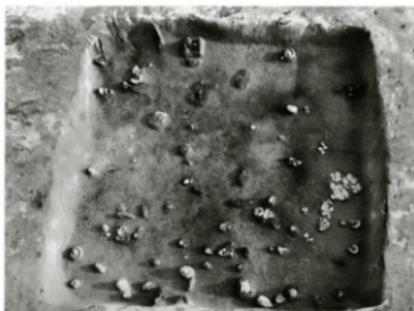
石巻地方の古墳時代遺跡

新金沼遺跡

宮城県石巻市蛇田字新金沼地内に所在する、古墳時代前期を中心とした集落遺跡。これまでの調査で、39軒の堅穴住居跡がみつかっており、壇・甕・台付甕・壺・高壺・器台・櫃など様々な種類の土器や、北海道や東海地方の特徴をもつ土器が出土している。そのほか、2つの注口をもつ土器や住居内からガラス玉・管玉がみつかっており、これらは、支配者か祭祀にかかる特殊な人物が使用していたと考えられている。

北と南の玄関口

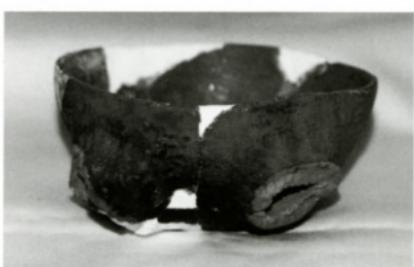
石巻地方では、弥生時代の遺跡の発見が少なく、古墳時代前期の遺跡の発見が多いのが特徴としてあげられる。中でも、新金沼遺跡は、北海道系の土器（続縄文土器）と、東海系の土器（S字状口縁台付甕の破片など）がみつかっており、この地における、古墳時代の様相を探る手がかりとして重要な遺跡である。新金沼遺跡で東海系の土器が発見されることで、この地に、東海地方との交流があったことは明らかであり、ヤマト政権を受容し、その下に組み込まれていたことの表れとも解釈できる。また、続縄文土器が発見されているのも興味深いことである。北海道地方との交流もあったとするならば、本遺跡は、東日本の北と南の文化の接点、もしくは古墳文化と続縄文文化の接点としての意味をもつ港的な玄関口としての遺跡ではなかったのか。遺跡の周辺は、海退による浜堤と河川による自然堤防が交差しており、湿地と小高い平坦地とが入り組んでいたと思われる。海の道・山の道・河の道などの玄関口としての港的役割を果たしていた遺跡であると考えるならば、環境的にも充分であり、他地域の土器や、変わった形の土器がみつかってもおかしくはない。現段階では、想像の域を越えるものではないが、今後の調査によって新しい事実が発見されるよう期待したい。



新金沼遺跡（石巻市） 第18号住居跡



続縄文土器 新金沼遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



注口が2つ付いた土器 新金沼遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



壺型土器の出土状況（第18号住居跡）



土師器（壺） 新金沼遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



壺と甌の出土状況



土師器（甌・瓶） 新金沼遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



新金沼遺跡 第6号住居跡（炭化材出土状況）



新金沼遺跡 第18号住居跡出土 土師器

しんやまざき 新山崎遺跡

宮城県石巻市蛇田字三ツ口南・新山崎に所在する、縄文時代晩期および古墳時代から近世にかけての遺跡。平成8・9年の調査により、3基の方形周溝墓のほか、古墳時代前期の井戸枠、多数の土器などがみつかっている。方形周溝墓群は、集落から独立して墓域を形成しており、その配置から一定の計画性が想定される。また、古墳時代前期の井戸枠は、県内でも最古のものに位置づけられることから、当時の生活を知る上で貴重な発見となった。

なお、本遺跡から南東約2kmのところには、新金沼遺跡がある。



新山崎遺跡 方形周溝墓群



新山崎遺跡 井戸枠出土状況



井戸枠 新山崎遺跡(石巻市) 石巻市教育委員会 藏



土師器(壺) 新山崎遺跡(第3号方形周溝墓)
石巻市教育委員会 藏



新山崎遺跡出土土師器(第5号土坑) 石巒市教育委員会 藏

たみちょう 田道町遺跡

宮城県石巻市田道町に所在する、弥生時代から古代にかけての遺跡。古墳時代前期の堅穴住居跡が9軒みつかった。いずれの住居跡も隅丸の長方形で、東南を向いている。土師器が出土したほか、古墳時代の土錐の一部に、稻作を示すモミの圧痕がついたものがみつかっている。

なづか 糠塚遺跡

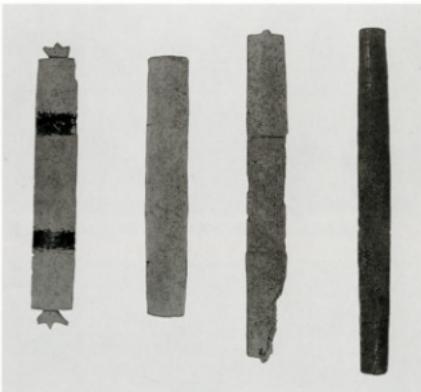
宮城県桃生郡河南町須江字糠塚に所在する、古墳時代および奈良・平安にかけての遺跡。古墳時代前期の住居跡が7軒みつかっている。古墳時代前期の土器群は塙釜式後半期の特徴をもつもので、田道町遺跡出土の塙釜式土器群の一部とも年代的に併行する。

ごしうざんどうくつ 五松山洞窟遺跡

宮城県石巻市湊字町裏山に所在する、弥生時代と古墳時代後期の遺跡。昭和57年の調査により、弥生時代後期から末期の土器・鉄製品・石斧が発見された。また、狹い洞窟内に、古墳時代の人骨が19体埋葬されていた。それらの人骨は二次的に埋葬されたもので、集合状態から8群に分かれるが、個体として一括できる人骨がなく、また特定の葬法を示すものもなかった。鉄製の武具や武器、金銅製の刀装具や装身具、骨角製の武器・武具および装身具、骨角製・貝製の装身具などが、人骨群とともに発見された。なお、武具には衝角付冑や金銅製圭頭大刀などがみられる。



こうせいようわく
鐵製衝角付冑 五松山洞窟遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



こくせい
骨角製剣 五松山洞窟遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏



こうせいじやくとびき
金銅製直刀及び鞘、飾板、切羽など 五松山洞窟遺跡（石巻市） 石巻市教育委員会 藏

鹿松貝塚

宮城県石巻市渡波字鹿松に所在する。平成8・10年の調査によって古墳時代前期の住居跡が2軒確認された。この住居は火災で焼けており、炭化した木材が見つかった。



土師器 鹿松貝塚（石巻市） 石巻市教育委員会 藏

古墳時代のマツリ

集落遺跡からは、祭祀に使われたとみられる石製模造品や白玉・勾玉などが出土することがある。人々は神に何を祈ったのであろうか。



石製模造品 新田遺跡（多賀城市） 多賀城市教育委員会 藏

新田遺跡

宮城県多賀城市新田・山王・南宮に所在する、古墳時代から近世に及ぶ複合遺跡。継続的に実施されている調査により、古墳時代前期・中期に属する遺構、遺物が発見され、広範囲に古墳時代の集落が存在することが明らかになった。

また、後地区的調査では、古墳時代中期と後期に属する堅穴住居跡5軒、祭祀遺構2基などが発見され、白玉・有孔円板・劍形などの石製模造品などがみつかった。



土師器（高杯） 新田遺跡（多賀城市） 多賀城市教育委員会 藏

用語解説

埴輪

埴輪は、大きくは円筒埴輪と形象埴輪とに分けることができる。円筒埴輪は、単純な筒形をした円筒と、上部の口縁がラッパ状に開く朝顔形円筒がある。形象埴輪は、住居や倉庫などの建物を表した家形埴輪、甲冑（かっちゅう）、鞆（ゆき）、鞆（とも）などの器物を表した器財埴輪、水鳥や馬などの生き物を表した動物埴輪、そして様々な人物埴輪などがある。この他にも、船や宗教的なものを表したと思われる埴輪がある。

- ・ 細形埴輪 一矢を入れて背負う道具。古墳時代に、戦闘の主要な武器の一つであった矢は、鞆などの矢筒に入れて持ち運ばれた。
- ・ 鞆形埴輪 一弓を射るとき、腕を守る道具。弓をひく人の左の手首に結びつけ、矢を放った際に、弦の衝撃を防ぐのに用いる。

*① 筒形埴輪



*② 馬形埴輪



*③ 家形埴輪



*④ 鹿形埴輪



菅玉

竹管状をした玉。弥生時代では一般に碧玉岩（へきぎょくがん）または鉄石英で作られ、長さ1~2cm、径0.2cm程度のきわめて細く短小な形が特徴的である。古墳時代に入ってからは、碧玉岩の他水晶・瑪瑙・ガラスなどの材質をくわえるとともに量も増し、大は長さ10cm、小は1cmに満たず、径も大は2~3cmから、小は0.3~0.5cm程度のものまで大小さまざま、中心にあけられた孔は普通両側からあけられるが片面穿孔のものもある。

切子玉

飾り玉の一種。水晶の結晶柱の上下両面をきりおとし、銅張りにみがきあげた形で、六角錐形が最も一般的であり、四角・七角・八角などのものもみられる。

大きさは一定しないが、長さ2~3cm、腹径1~1.5cm程度のものが多い。日本では後期古墳から多く出土する。一般に中央の孔は片面よりあけられており、大形品は両面穿孔である。材質に水晶が最も多く用いられているのは、水晶の六菱形の美しい結晶体が利用されたためであろう。ほかにガラスや瑪瑙（めのう）・埋木（うもれぎ）などでも作られる。

*① 卷頭カラー1頁

*② 茨城県新治郡八郷町柿岡出土 明治大学考古学博物館蔵

*③ 卷頭カラー7頁

*④ 三味塚古墳 茨城県立歴史館蔵

ガラス玉

ガラスはフェニキア人によって発明されたといわれる。弥生時代にガラス製の鏡（くしろ：腕輪）や小玉などが見られ、勾玉の錫范（ようはん：錫型）も発見されているから、材料は中国などから輸入されたにしても、弥生時代にはすでにわが国でも製作されていたことがしられる。古墳時代には小玉や丸玉が多量に副葬され、青・黄・緑・紺や赤褐色など色彩も豊かで、後期にはトンボ玉もみられる。

小玉

直径2～3mmの小さな丸い玉をさし、長さが径より短いものも多い。弥生時代には貝製小玉もあらわれ、これは古墳時代に盛行し、飛鳥・奈良時代にも継承される。色は水色だけではなく、古墳時代中期以降は浅黄や黄・緑など色の種類を増し、奈良時代には各種の色ガラスが用いられた。小玉の材質は大半がガラスであるが、まれに瑪瑙や土製もあり、また古墳時代中期には滑石製小玉が祭祀用として大量に作られている。ガラス小玉は装身用として、首飾のみならず耳飾や、手首・足首などにまでいくつも連ねて飾ったことが、埴輪の人物によってうかがわれ、小玉の間に勾玉や菅玉・切子玉などを配して単調さを補っているものもみかける。

勾玉

装身用の玉の一種。頭から尾に至って次第に細く、C字状に彎曲し、頭部に小円孔を穿つ。孔に向かって3～4条の線が彫られたものがあり、丁字（ちょうじ）の花に似ているところから丁字頭（ちょうじがしら）勾玉とよばれる。古墳時代では硬玉製品のほか碧玉製品も多く、前期にはかなり大型のものがみられる。また滑石製品は中期に祭祀用として一括して大量に出土する例が多い。後期には水晶や瑪瑙・琥珀（こはく）あるいは稀に金銅製品などもみられる。

土師器

攝氏800度前後で酸化・焼成法によって焼かれた素焼土器、色調は褐色・黄褐色・赤褐色を呈している。

盆

皿より深く、椀より深い形態。もっぱら食器として使用された。脚の付けられたものを高坏（たかつき）と呼び、蓋のあるものもある。古墳時代には最も多くつくられた器で、歴史時代に至るまでの住居跡や古墳から土師器坏・須恵器坏の出土が多く、このころの主たる食器であったのだが、のちには皿・椀・鉢などと混用された。

高坏

坏に脚をつけた食器。古墳時代の土師器や須恵器の高坏は、古墳から多く出土し、丹を塗ったものもあり、祭器として、また供献用食器としても使用されたことがうかがわれる。

こしき 瓶

穀類を調理して食用とするための蒸し器。

ぞくじょうもんどき 縄文土器

稲作農業を基盤とする弥生文化が日本の大部分にゆきわたり、そこでは縄文文化の伝統が漸次解消していったときには、北海道と奥羽北部地方では自然環境が稲作の普及をはばんだために、もっぱら狩猟漁撈の生活に依存し、縄文式土器の伝統を強くこした土器を用い、石器・骨器を基本的な利器とした文化が、擦文（さつもん）土器文化、オホーツク式土器のはじまる時期まで存続した。山内清男はこの文化の土器を統縄文式土器と名付けた。

奥羽の一部を除いた本州の大部分が、稲作栽培を生活の基盤とした弥生式文化に交替したところ、北海道はその地理的事情から、農耕は行われなかった。したがって本州では縄文文化は終焉したが、北海道ではなおも縄文文化の伝統が続いた。これを統縄文文化といい、その土器を統縄文土器という。

ほうけいしゃくうぼ 方形周溝墓

弥生時代から古墳時代前半期に營まれた、回りに溝をめぐらし方形の平面をもつ低墳丘墓をいう。平地で周りに溝をめぐらすことによって墳丘を画するのを特徴とする。弥生時代前期に近畿地方に出現し、中期以降、九州から東北地方にわたる各地に拡がった。ただ九州地方に出現するのは弥生時代後期以降であり、東北地方に及ぶのは古墳時代であろう。古墳時代前期までは各地で盛んに營まれたが、中期以降急速に衰退した。なお方形周溝墓には、周溝の一部を共有して互いに連接して營まれたものが少なくない。方形周溝墓の性格については、共同体内部の有力世帯の墓と考えられている。

魏志倭人伝

晋の陳寿（233—97）が撰んだ中国正史の一つ『三国志』のなかの『魏志』30、東夷伝、倭人条を、「魏志倭人伝」と通称する。これは魚豢（ぎょけん）の『魏略』によったもの。のちにできた范曄（はんよう、398—445）の『後漢書』115、東夷伝、倭条（「後漢書倭伝」）は、「魏志倭人伝」をおそたるもの。王朝の年代とその史書の成立が逆である。

くぬごく 狗奴国

『魏志』東夷伝倭人条にみえる国名。『魏志』には、斯馬国（きばこく）以下奴国（なこく）に至る21の国名をあげて、「此れ女王の境界の尽くる所なり」（原漢文）とし、ついで「其の南に狗奴国あり」（同）と記述する。そして男子を王とし、その官に狗古智卑狗（くこちひこ）があり、女王に属せざと表現している。また倭の女王卑弥呼（ひみこ）は狗奴國の国王と対立したと描く。『魏志』には「狗奴國国王卑弥呼素不和」とあるが、その読み方も「狗奴國の国王卑弥呼呼素、素より和せず」とする説や「狗奴國の国王卑弥呼呼素、和せず」とする説などがある。

魏

中国の王朝名（220—65年）。曹魏ともいう。首都洛陽。帶方郡を経由する魏と倭の交渉は、『魏略』や『三国志』魏志倭人伝にわが国に関する最古のまとまった記事（著名な邪馬臺国の女王卑弥呼の所伝をはじめ倭人の風習などを含む）を残し、各地の古墳から景初・正始など魏の紀年鏡が発見されてこれを裏付けている。

たいほうぐん 帶方郡

後漢の建安年間（196～220）西晋の建興元年（313）ごろまで、朝鮮半島の西側中央部におかれた中国の郡。設置当時、帶方郡は勃興しつつあった南部の韓族や漢族、日本列島の和冠に対する中国勢力の対置機関としての性格をもっていたから、これらの諸族との政治・経済上の折衝は帶方郡が取り扱った。したがって倭国の中華王朝との交渉も、この郡を通じて行われた。

しんじゅくきょう 神獸鏡

神獸鏡は縁の形態により平縁（ひらぶち）神獸鏡と三角縁（さんかくぶち）神獸鏡とに大別される。このうちで主流を占めているのは平縁神獸鏡（内区にくらべて肉厚となった外区は、断面が平坦なため平縁の名が用いられる）で、三角縁神獸鏡は日本の古墳出土鏡に限られ、今まで中国本土での出土例はない。

にゅうしんきょう 乳文鏡

倣製鏡の一種。内区の文様が主として小突起状の乳のみで構成されているものを指す。乳文には蕨手文（わらびでもん）や弧文などがついたものが多く、倣製獸形鏡の系譜を引くものと考えられている。外区には櫛目（くしめ）文帯・鋸齒（きょし）文帯・複線波文帯などをめぐらし、縁は素文平縁である。つくりは一般に粗雑で、小形のものが多い。6世紀代の後期古墳からの出土が多い。

ぼうせいきょう 做製鏡

中国鏡を手本として弥生時代後期から古墳時代に製作された鏡。国産鏡の名もあり奈良時代以降に製作された和鏡とは区別をしている。中国鏡の文様をそっくりまねたもののほか、中国鏡の文様の形式化した例などがある。文様をまねたものでも、もとのモチーフが理解されていないために、神獸等の文様がくずれたり、銘文の文字がくずれて意味のない文様の羅列となり、いわゆる偽銘帯となっていて、これらの点から舶載鏡と区別される。また銅質も悪く、鋳上りも舶載鏡にくらべて劣っている。做製鏡は弥生時代後期の前漢鏡をまねた小型の内行花文鏡に始まったと考えられるが、盛んに製作されるのは古墳時代に入ってからである。

ほくさいきょう 舶載鏡

弥生時代・古墳時代の遺跡から出土する鏡のうち、中国本土で製作されたとする考えられる鏡のこと。

かんとうたち 環頭大刀

本来中国で発達した大刀形式が朝鮮半島を経由して古墳時代の日本へ伝播したものである。『漢書』に竜雀大刀をなすとあるのは、大刀の把頭に四神のうちの青龍（東方）・朱雀（南方）の形を表わしたことと示しているが、その初現形式は把頭をかんたんな輪形につくり、これに手貫緒をつけて携帯した実用から、大刀そのものの姿に四神の思想が結びついたと考えられる。

どう　たく 銅鐸

弥生時代の国産青銅器の一種。裾の広がる扁円筒形の身は空洞で、両側に張り出す板状の鰭（ひれ）、身の上頂（舞）に鰭から立ちあがる半円形または小判半折形の鉢（ちゅう）と呼ぶ釣手からなる青銅製鉢物。身を横帯で上下に仕切る横帯文と、綴と横の帯で割り付ける袈裟襷文（けさだすきもん）が基本。

主体部

棺を納めるための埋葬施設。竪穴式石室や横穴式石室などがある。

竪穴式石室

古墳の本来的な埋葬施設。基本的には、墳頂部に穿たれた大きな墓壙の底部中央に粘土を敷いて長大な割竹形木棺（わりたけがたもっかん）を安置し、その周囲に扁平な割石を積んで四壁を構築し、天井石をのせてさらにその上部を粘土で被覆し、墓壙を土で埋めたものである。

横穴式石室

古墳の埋葬施設のうち、横に通路や入口をもつ石組みの墓室をいう。古墳時代の後半期に盛んに営まれたもので、主として古墳時代の前半期に営まれた竪穴式石室が構造的に追葬が困難なのに対し、追葬が容易な点が最大の特徴である。墳丘内に営まれる墓室である玄室（げんしつ）と墳丘外から玄室に至る通路である羨道（せんどう）とからなる。玄室の入口部を玄門、羨道の入口部を羨門と呼ぶこともある。本来、埋葬が行われる空間は玄室で、石棺や木棺はここにおかれたが、次第に羨道部にも埋葬が行われるようになっていった。

鍬

鍬とともにわが国古来の代表的な農具で、耕起だけでなく、碎土・地均し、中耕・除草など多種の用途を持っている。用途・形態・材料によって打鍬・引鍬・打引鍬および石鍬・木鍬・金鍬などに区別される。

鋤

鋤は人間の手や足の圧力により押し込み作用でもって土を切り、はね起す農具である。鋤は現在ではほとんどが足踏み式の踏鋤であるが、古くはまっすぐな櫂状の鋤が主であったようである。



膝柄二又鋤 中在家南遺跡（仙台市）
仙台市教育委員会 藏



一木二又鋤 中在家南遺跡（仙台市）
仙台市教育委員会 藏

*この用語解説は『国史大辞典』（吉川弘文館）を主に参照した。

企画展「東日本の古墳時代」出品目録

所 �藏 者	資 料 名 称	点 数	遺 踪 名
茨城県立歴史館	杏 葉	5	(伝) 舟塚古墳
	辻金具	4	(伝) 舟塚古墳
	鏡 板	1 対	(伝) 舟塚古墳
	四獸鏡	1	(伝) 舟塚古墳
	銅 鏡	1	(伝) 舟塚古墳
	鉄 鏡	8	(伝) 舟塚古墳
	金装大刀	1	(伝) 舟塚古墳
	銀装大刀	1	(伝) 舟塚古墳
	双龍環頭大刀	1	(伝) 舟塚古墳
	切子玉	1 束	(伝) 舟塚古墳
	銀製空玉	1 束	(伝) 舟塚古墳
	丸 玉	1 束	(伝) 舟塚古墳
	朝顔形埴輪	1	舟塚古墳
	金銅製垂飾付耳飾	1 対	三味塚古墳
	平縁変形四神四獸鏡	1	三味塚古墳
	変形乳文鏡	1	三味塚古墳
	鹿形埴輪	2	三味塚古墳
	菅 玉	1 束	三味塚古墳
	小 玉	7 束	三味塚古墳
	家形埴輪	1	茨城県内出土
	金銅製馬銘付冠 (複製品)	1	三味塚古墳
	円筒埴輪	1	権現山古墳
	三角透しの円筒埴輪	1	権現山古墳
	線刻入りの円筒埴輪	1	権現山古墳
	須恵器 (筒形器台)	1	権現山古墳
	土師器 (甕)	1	権現山古墳
	土師器 (壺)	1	権現山古墳
	土師器 (坏)	4	権現山古墳
	土師器 (壺)	3	権現平 2 号墳
	土師器 (小型壺)	3	権現平 2 号墳
	金 壱	3	富士峯古墳
	勾 玉	5	富士峯古墳
	小 玉	一括	富士峯古墳
	銅 鏡	2	富士峯古墳
	直 刀	2	富士峯古墳
明治大学考古学博物館	袈裟搏文銅鐸	1	出土地不明
	三角縁神獸鏡	1	(伝) 物集女
	人物埴輪 (農夫)	1	茨城県新治郡八郷町柿岡出土
	人物埴輪	1	出土地不明
	馬形埴輪	1	茨城県新治郡八郷町柿岡出土
	弥生土器 (壺)	1	東京都板橋区赤塚 4 丁目付近出土
	弥生土器 (蓋)	1	神奈川県伊勢山遺跡
	弥生土器 (甕)	3	中在家南遺跡
	弥生土器 (高坏)	5	中在家南遺跡
	弥生土器 (鉢)	11	中在家南遺跡
	弥生土器 (蓋)	3	中在家南遺跡
	弥生土器 (甕)	2	中在家南遺跡
	木製品 (一本二又脚)	1	中在家南遺跡
	木製品 (堅杵)	3	中在家南遺跡
	木製品 (斧膝柄)	2	中在家南遺跡
	木製品 (膝柄二又脚)	2	中在家南遺跡
	円筒埴輪 (半円形の透し孔)	1	裏町古墳
	須恵器 (樽形壺)	1	裏町古墳
	須恵器 (台付壺)	1	裏町古墳
仙台市教育委員会			

所 藏 者	資 料 名 称	点 数	遺 跡 名
多賀城市教育委員会	須恵器（甕）	1	山王遺跡
	木製品（手斧の柄）	1	山王遺跡
	土師器（高坪）	4	新田遺跡
	土師器（甕）	2	新田遺跡
	石製模造品（円盤形）	21	新田遺跡
	石製模造品（剣形）	20	新田遺跡
	石製模造品（勾玉）	1	新田遺跡
	石製模造品（石鏡）	1	新田遺跡
	イラストバネル（集落の様子）	1	(伝)舟塚古墳
	イラストバネル（祭祀の様子）	1	(伝)舟塚古墳
名取市教育委員会	雷神山古墳全景写真バネル	1	雷神山古墳
仙台市博物館	銅 鐸（複製品）	1	(伝)舟塚古墳
石巻市教育委員会	続繩文土器	1	新金沼遺跡
	土師器（甕）	1	新金沼遺跡
	土師器（甕）	4	新金沼遺跡
	土師器（壺）	4	新金沼遺跡
	土師器（台付甕）	1	新金沼遺跡
	土師器（小型壺）	4	新金沼遺跡
	土師器（坪）	2	新金沼遺跡
	土師器（器台）	2	新金沼遺跡
	土師器（高坪）	1	新金沼遺跡
	土師器（注口が2つ付いた土器）	1	新金沼遺跡
	土師器（縄目がついた土器）	2	新金沼遺跡
	土師器（S字状口縁台付甕口縁部破片）	2	新金沼遺跡
石 嶽	石 磁	8	新金沼遺跡
	石製品	2	新金沼遺跡
	管 玉	1	新金沼遺跡
	土師器（壺）	3	新山崎遺跡
	土師器（甕）	10	新山崎遺跡
	土師器（高坪）	1	新山崎遺跡
	土師器（鉢）	1	新山崎遺跡
	土師器（器台）	8	新山崎遺跡
	井戸枠	1	新山崎遺跡
	土師器（甕）	2	鹿松貝塚
	土師器（高坪）	1	鹿松貝塚
	土師器（坪）	1	鹿松貝塚
	土師器（小型土器）	4	鹿松貝塚
	金銅製品（柄頭）	1	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（鉢）	1	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（柄縁金具）	1	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（切羽）	1	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（鞞）	2	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（耳環）	2	五松山洞窟遺跡
	金銅製品（飾板）	2	五松山洞窟遺跡
	直 刀	1	五松山洞窟遺跡
	鉄 蔵	20	五松山洞窟遺跡
	衝角付冑	1	五松山洞窟遺跡
	弥生土器	5	五松山洞窟遺跡
	須恵器	1	五松山洞窟遺跡
	骨角製品（弭）	1	五松山洞窟遺跡
	骨角製品（弭）	5	五松山洞窟遺跡
	骨角製品（刀子柄）	3	五松山洞窟遺跡
	貝 輪	1	五松山洞窟遺跡
	環狀製品	5	五松山洞窟遺跡

この展覧会にご協力いただいた方々（敬称略・五十音順）

朝日新聞社	茨城県立歴史館	霞ヶ浦ふれあいランド
仙台市教育委員会	仙台市博物館	多賀城市教育委員会
多賀城市埋蔵文化財調査センター	玉里村立史料館	玉造町教育委員会
名取市教育委員会	明治大学考古学博物館	

井上 貴	遠藤 武	木村 陽一	窪田 忍
黒沢 浩	小谷 和弘	小玉 秀成	佐藤 洋
佐藤 芳子	島田 和高	主濱 光朗	高橋 圭蔵
中谷 正	能登屋良子	平賀 康意	藤沢 敦

引用・参考文献

日本の歴史 第2巻『王権誕生』	寺沢 薫著	講談社	2000年
新版『古代の日本』第9巻 東北・北海道	須藤 隆はか編	角川書店	1992年
『仙台市史』特別編2 考古史料	仙台市史編さん委員会		1995年
『多賀城市史』第4巻 考古資料	多賀城市史編纂委員会		1991年
玉里村埋蔵文化財調査報告第1集『権現平古墳群調査報告』伊藤 重敏編	玉里村教育委員会		1994年
石巻市文化財調査報告書第8集『新山崎遺跡』	石巻市教育委員会		2000年
開館5周年記念特別展『地方王権の時代』	玉里村立史料館		1999年
『霞ヶ浦の首長』—古墳にみる水辺の権力者たち—	霞ヶ浦町郷土資料館		1997年
『倭国乱る』	国立歴史民俗博物館編 朝日新聞社		1996年
図説『福島の古墳』	福島県立博物館		1992年
企画展『会津大塚山古墳の時代』	福島県立博物館		1994年
朝日百科『古墳はなぜつくられたのか』	廣田 一編	朝日新聞社	1995年
仙台市文化財調査報告第213集『中在家南遺跡 他』	仙台市教育委員会		1996年

企画展

東日本の古墳時代

～弥生から古墳へ～

平成13年6月15日(金)～7月29日(日)

発行年月日 2001年6月15日

編集・発行 石巻文化センター⑥

〒986-0853

宮城県石巻市南浜町一丁目7-30

TEL 0225-94-2811

印刷 鈴木印刷所

